

たくはつ
「托鉢」

平成22年 2月 第3週 放送

皆さんは、街で網代笠をかぶり、器をかかげ持って鈴をならし、錫杖という杖をつき、托鉢をしている僧侶を見たことがありますか？ 修行道場のご近所にお住まいや、故郷のある方々は、年末助け合い托鉢や、寒の頃の寒行托鉢を見かけられた事でしょう。

托鉢は出家したものが大切に行ってきた修行です。出家修行者は生産活動、つまり一般的な職業に就くことが出来ませんでした、そのため托鉢をし、食べ物などを頂き生活をしていたのです。

托鉢は、する者にも修行でなくてはなりません、実は物を施す方にも修行なのです。いわゆる、「布施行」の実践です。皆さんご存じの「お布施」も「布施行」に含まれる訳です。

ここで云う「布施」とは、代金ではありません。対価交換つまり、ある物の報酬として代金や物を頂くものではないのです。

道元さまは、

ただかれほうしゃむさほみすかちからわか
「但彼が報謝を貪らず、自らが力を煩つなり」

おっしゃ
と仰いました。

ふせむくかんしゃ
つまり、「布施」の報いや感謝を求めず、自分の出来る中でその力を分け与えるという事です。

たくはつ いただ とな せざい げ ことば
また、托鉢では頂いた時にお唱えごとをします。『施財の偈』という言葉です。

ほどこ ほどこ しゅうちやく
この言葉は、施した人も、受けた人も、施した物も、執着つまり、とらわれていたら、そこには心の安らぎは得られない。と云っているのです。

. . . .
執着、つまりとらわれから離れることが、托鉢のころなのです。

たくはつ ほどこ がわ ほどこ がわ ほどこ こうい
托鉢の施す側、施される側、施す物や行為、この三つの関係は日常生活にも見られます。

「・・してあげたのに・・」「・・してもらった・・」「お礼をいった・いわなかった」

. . . .
などと、とらわれていたらあまり良い関係にはなりません。

たくはつ にちじょうせいかつ
托鉢のころは、日常生活を生きる私たちにも大切な教を示しているのです。